

集

病院経営者の羅針盤

中

2016年1月31日発行(毎月月末発行) 第9巻第2号通巻95号 定価1,500円(本体1,389円) 年間購読料18,000円

MediCon.

2

2016 FEB

がんになっても人生は続く
職場で無理なく受け入れる対策を

高橋都

国立がん研究センター
がん対策情報センター
がんサバイバーシップ支援部長



Art in Hospital

越川病院
なかむら歯科

「マイナンバー汚職事件」の 幕引き急いだ厚労省の策略

「横倉会長3選」と引き換えに 日医が負う“宿題”

認

知症といえ、アルツハイマー型認知症、処方するのはアリセプト。重篤な副作用が知られないまま増量される薬剤。認知症が社会問題になっていくにもかかわらず、このように安直になされる治療に、ようやく医療者の間で問題視する動きが出てきている。

一つは、最近設立されたばかりの一般社団法人「抗認知症薬の適量処方を実現する会」(代表理事＝長)

尾和宏・長尾クリニック院長)だ。アリセプトに代表される抗認知症薬を増量規定によって処方すると重篤な副作用が出るケースが多々あるとして、高齢者医療に関わる医師らが創設した団体である。

さらに、2015年に設立された「認知症治療研究会」(代表世話人＝堀智勝・新百合ヶ丘総合病院名譽院長)がある。認知症治療の現場が荒れ放題なのを見て、今まで認知症を

専門にしていなかった医師にも積極的に認知症を診ることを推進し、また、認知症臨床で得た有益な知識を認知症臨床に携わる全ての人々で共有し、全国で認知症の最新医療が受けられるようにするために、認知症の治療に特化した研究会だ。同研究会の内容を詳細に見てみると、認知症治療を行うに際してのベースを「コウノメソッド」としている。

と、突き当たるのがコウノメソッドだ。同メソッドは、日本の認知症治療の第一人者ともいわれる名古屋フオレストクリニック院長の河野和彦氏が開発した認知症に対する治療体系。診断や症状評価に応じたきめ細かな薬物療法と、認知症をはじめ老化に伴う症状に効果の高いサプリメントを併用する治療方法を推進している。河野氏は30年以上認知症治療を専門に行い、年間の新患は14、

「認知症」の医療現場は無法地帯②

「節目」を迎えつつあるアリセプトの置かれた環境

00人以上にも上るといふ。試行錯誤する中で、真に有効と思えるものだけをメソッドにしたそうだ。

中核? 周辺? 真つ向分かれる治療法

一般的に行われている認知療法とコウノメソッドの決定的な違いは、「中核症状」から治療するか、「周辺症状」から治療するかどうか。中核症状には、記憶障害、見当識障害、

実行機能障害、理解力・判断力の低下、感情表現の変化などが含まれる。大きくくりでいえば、いわゆる激しい物忘れだ。一方、周辺症状には徘徊、暴言、妄想、幻覚、無気力などが挙げられる。

抗認知症薬の代表格であるアリセプトは、中核症状に効く薬剤で、物忘れの改善や悪化の防止によって、徘徊や妄想の症状を軽減させられる

とする。コウノメソッドは、その逆だ。微量の抗精神病薬やサプリメントを駆使して周辺症状を取り除いた後、中核症状の改善を図るべく抗認知症薬を投与する治療法を取る。

抗認知症薬を発売する製薬会社と河野氏の真つ向対立の図式は明らかで、これまで開かれた公開討論などでも、両者の意見は対立してきた。同メソッド実践医で千葉県市川市

社会

そうした治療の後に中核症状の治療に移れば、副作用が出やすいアリセプトは5mg未満の少量でも十分に効果が期待できます。

中核症状に対する治療目的ではなく、アルツハイマー型認知症の診断のために少量のアリセプトを処方する場合もあるようだ。

「画像で異常が見られない場合でも、アルツハイマー型認知症の可能性は否定できません。そこで、アリセプト1.5mg程度から処方を開始してみて、改善すればアルツハイマー型認知症と診断でき、逆に小刻み歩行になってきたり、暴力や徘徊などの副作用が出てきたりした場合、アルツハイマー型認知症は除外され

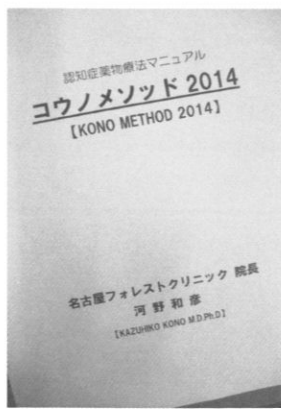
患者さんはレビー小体型認知症や前頭側頭葉変性症などの線で治療を進めます。いわばアリセプトは、アルツハイマー型認知症のリトマス試験紙のような役割を果たすのです」

コウノメソッドを頼って、河野氏の下には「認知症漂流者」ともいえる患者が全国から集まっている。ここで、ふと疑問が湧く。果たして同

メソッドはどの程度の広がりを見せているのか。名古屋フオレストクリニックのホームページには「コウノメソッド実践医 紹介」のレイヤーがあった。南は沖縄から北は北海道まで300超の医療機関が名を連ねている。さっそく東京のクリニックに絞って、コウノメソッドの実践ぶりを電話でリサーチしてみた。

だが、残念なことに芳しい回答を得ることはできなかった。電話をして「コウノメソッドの実践医院でしようか」と尋ねると、電話に出た受付嬢が「……」。多少間があった後、「少々お待ちください」と言われ、長い待ち受け音楽が流れた後に一番多かったのは、「認知症の治療は専門ではありません」「介護保険の書類は書きません」。珍しいところで、「院長が趣味で行っているので、患者さんは受け入れられません」だった。河野氏がいる西日本ではもう少し違ったのかも知れないが、全国のアベレージではおそらく似たり寄ったりではなからうか。

今受けている認知症治療に疑問を



患者が一縷の望みとするコウノメソッド

持っている患者や、ひどい認知症状を呈する家族をどうにかして良くしたいと願う患者家族が、ホームページや人づてに聞いたコウノメソッドを一縷の望みとしてすがり、実践医リストを見て電話で問い合わせた結果、前述のような対応をされたら、その失意はいかばかりか。同メソッドが全国に広まるには、足元の地盤を固める必要がある。

ちなみに、前出の松野氏は、諦めかけた電話リサーチで、たまたま東京近県ということで千葉県にあるクリニックにもアプローチして当たったクリニックだった。

レセプトが通らず負担金は数百万円

中核からか、周辺からか、どちらから治療するのが正解なのか、現状での判断は難しそうだ。しかし、少なくとも増量規定については河野氏に分がありそうだ。コウノメソッドでは、周辺症状を抑えてから抗認知症薬を処方するが、増量規定にはの

と、突き当たるのがコウノメソッドだ。同メソッドは、日本の認知症治療の第一人者ともいわれる名古屋フオレストクリニック院長の河野和彦氏が開発した認知症に対する治療体系。診断や症状評価に応じたきめ細かな薬物療法と、認知症をはじめ老化に伴う症状に効果の高いサプリメントを併用する治療方法を推進している。河野氏は30年以上認知症治療を専門に行い、年間の新患は14、